

局面動詞について

－ 「～始める」と「～出す」形の副詞的修飾成分との共起関係を中心に－

呉 鐘 烈

キーワード：局面動詞、副詞的修飾成分、共起関係、漸進性、突発性

要 旨

局面動詞の「～始める」、「～出す」形は、文脈によっては、置き換えが可能な場合もあるが、置き換えると不自然な場合も多い。これは「～始める」、「～出す」形の開始の仕方に密接な係わりを持つ。両者は〈過程性〉の意味特徴を持つ前項動詞と結合し、動作事象の始まりの局面を表す面では同様であるが、前項動詞の下位類の意味特徴によって結合の可否の決まる場合がしばしばある。一方、副詞的修飾成分は、文中における「～始める」、「～出す」形と共起しながら、これらの開始の仕方を修飾限定する役割を担っている。副詞的修飾成分と両形との共起関係について見ると、「～始める」形は漸次的な変化を表す、言わば「漸進性」の修飾成分と「突発性」の修飾成分の双方と共起し得るのに対し、「～出す」形は「突発性」の修飾成分と共起しやすいという傾向がかなり顕著に認められる。

0. はじめに

本稿の目的は、局面動詞¹⁾のうち、開始の局面を表す「～始める」「～出す」形の開始の仕方の違い²⁾と関連して、これらの開始の局面を表す表現形式と副詞的修飾成分との共起関係の全体的な傾向差を確認することである³⁾。

例えば、「雨が降り始めた⇔雨が降り出した」のように置き換えが可能な場合でも、「いきなり」や「にわか」にという修飾成分を加えると、「いきなり雨が降り出した」「にわか」に雨が降り出した」とは言えるが、「?いきなり雨が降り始めた」「?にわか」に雨が降り始めた」ではやや不自然な感じがする⁴⁾。

また、現実化直前の様相を表す表現では、「～始める」形より、「～出す」形が用いられる。例えば、次のような場合には、「～出す」形が用いられる。

[a] 夜は雨が降り出しそうだ。(? 雨が降り始めそうだ)⁵⁾

[b] 今にも動き出しそうだ。(? 今にも動き始めそうだ)

例文 [a] と [b] の「～出しそうだ／～始めそうだ」形は、厳密に言えば、開始が実現したわけではなく、その直前の様相を表す。このように開始の局面に向かっていることを表す場合も「～出す」形の方が用いられやすい⁶⁾。

また、次のように、文中における情態修飾成分⁷との共起関係からも同じことが言えるだろう。例えば、

- [1] 時計が六時をまわると少しずつ客の数も増えはじめた。 (世界)
[2] 京橋のビルへの魔手は、しだいに正体をあらわしはじめた。 (人民)
[3] 大次郎は、茶をのみ、ゆっくりと菓子を味わいはじめた。 (剣)
[4] そう考えると、私はだんだん腹が立ちはじめた。 (秒)
[5] 星の事業の発祥の地でもある京橋のビルを、前田一派は巧みに手中におさめようと、陰謀を徐々に進めはじめたのだった。 (人民)
[6] これらが起る一年も前に西欧に放っておいたスパイたちが、ようやくこの時期になって、次々と朗報をもたらしはじめたからでもある。 (陥落)

上記例の[1]～[6]の文脈からも窺えるように、「～始める」形は漸次的な変化を表す「少しずつ」「しだいに」「ゆっくりと」「だんだん」「徐々に」「次々と」などのような情態修飾成分と共起する傾向が強い。

- [7] 涙は耳朶を濡らして枕にしみ込む。そしてその時電話が突然に鳴り出したのだ。 (カ)
[8] 自分の頭が命令せんとに、いきなりつつつつつうーと足が走り出すとじゃけん。止まろうと思うひまもなか。 (三二)
[9] だから、高橋光三なんか急に結婚を急ぎだしたのである。 (坊)
[10] そこに屈強な若者がばらばらと自分たちを目かけて走り降りて来るのに気がつくと、にわかに、おびえたように逃げだしました。 (筑二)
[11] 千代は手をさし伸ばし頼圀の膝元から子供を受け取った。途端に子供は泣き出した。 (野)

一方、例文[7]～[11]の文脈からも窺えるように「～出す」形は「突然」「いきなり」「急に」「にわかに」「途端に」などの「突発性」を表す情態修飾成分と共起する傾向が強い。つまり、時間の緩急という速さの面から見ると、「～始める」形は、緩い開始の仕方であるのに対し、「～出す」形は、変化が急であることがわかる。

本稿では、上記のような事実に注目し、「～始める」と「～出す」形との副詞的修飾成分との共起関係の傾向性を記述することを目的とする。

1. 「漸進性」を表す修飾成分との共起関係

従来、上記で取り上げている修飾成分の分類を試みている研究としては、仁田(1983)、矢澤(1983)などが挙げられるが、中でも特に、被修飾成分との呼応及び出現位置と関連づけて、情態修飾成分に注目した研究としては、矢澤(1983)がよく知られている⁸。

矢澤の観察によると、修飾対象であるところの被修飾成分の動作的概念は、均質不可分のものではなく、いくつかの異質な「相」によって重層的に構成されるとし、情態修飾成分を関係構成のあり方の面から状態相修飾（動作的概念のうちモノのサマのあり方を修飾限定する）と様態相修飾（静的なモノのサマではなく、動的な動作・作用そのものの行われ方-manner: 様態を表す）とにわけ、これらの両者は動作的概念の異なる質（相と呼ぶ）を修飾限定しているとする。さらに、状態相の下位相には結果相と状況相とを設け、様態相の下位相には、過程相（動態の過程のあり方を修飾限定する）を、そして、この過程相はまた、生起相（事象（コト）の起こり方を修飾限定する）と進行相・動作相を設け、情態修飾成分の範囲と分類を提示している。

本稿では、上記の矢澤の分類を受けてそのうち、最上位相である様態相修飾成分⁹（動態の過程のあり方を修飾限定する）に属すると考えられる一群の修飾成分（以下、副詞的修飾成分と呼ぶ）が文中における開始の局面を表す「～始める」、「～出す」両形と如何なる共起関係を成しながらこれらの開始の仕方を修飾限定しているのかを中心に考察を進める。

[12] そして彼は崖下に見えるとその男の云ったそれらしい窓を暫く捜したが、何処にもそんな窓はないのであった。そして彼はまた暫くすると路を崖下の町へ歩きはじめた。(三三)

[13] 怒声に似た命令が艦上を走り、乗組員たちは思い思いの方向に走りはじめた。(戦)

[14] 営業契約も終って、造船所は、第二号艦起工に本格的に動きはじめた。(戦)

[15] 佐倉はそういうと、坂の途中から左側に折れて、明るい通りに出ると、植込みの奥に青く輝くガス灯の光に向って歩きだした。(孤)

[16] これは悪くない徴候だった。太郎は、スターターの音を飲み込むような思いで走りだした。(太郎)

[17] 弁当を半分ほど食べたとき、電車が動きだした。(冬)

例えば、例文 [12] ~ [17] のそれぞれの「歩き始めた」「走り始めた」「動き始めた」そして、「歩き出した」「走り出した」「動き出した」では「歩く」「走る」「動く」動作の具有する生起相を「開始」という側面から特示する働きをする¹⁰。言い換えれば、これは「歩く」「走る」「動く」動作の始まりの局面を取り立てているとも解釈される。いずれにせよ、「(ゆっくり)歩き始めた、走り始めた、動き始めた」「(ゆっくり)歩き出した、走り出した、動き出した」の場合「(歩き)始める」「(走り)始める」「(動き)始める」動作の様態、つまり「ゆっくり」という様態修飾成分は「歩く」「走る」「動く」動作の始まりの局面を修飾限定していると言えよう。さらに、「～始める」、「～出す」形の開始の仕方と関連して、文中における副詞的修飾成分がどういう役割を果たしているかを見てみよう。

- [18] しばらくうつむいて考えていたが、やがて顔を上げ、ゆっくと喋り始めた。(一瞬)
- [19] すると、五郎はまた袋をくわえて、私の方へ気を配りながらのろのろとあるきはじめた。(忍)
- [20] 黒い路面に少しずつ白いものが積り始めた。(朝)
- [21] そして、眼の前の床に、巻物を次々と広げ始めた。(陥落)
- [22] 時間は徐々にその広がりを見え始めた。(尚2)
- [23] テルは、次第に疲れが見え始めた。(ペ)
- [24] 男はいつか私の話に、だんだん心を動かし始めました。(三2)
- [25] しかし、作品は、私からはなれ、どンドン一人歩きし始めてしまった。(三2)

例文 [18] ~ [25] のそれぞれの修飾成分は「～始める」形の開始の仕方を修飾限定している。ここで注目したいのは、変化の仕方が漸次的である様子を表す「ゆっくと」、時間にせかさず急がない様子、つまり緩やかな様子を表す「のろのろと」などは継続的な動きを修飾している¹¹。このような修飾成分の性質からも窺えるように、その様態を緩急(速さ)の面から見ると、急ではなく緩い方(速くない)であるということである。また、同じ分量に分ける様子を表す「少しずつ」¹²、異なる物事が続いて起こる様子を客観的に表す「次々と」、変化する度合が非常に少ない様子を表す「徐々に」¹³、状態が少しずつ変化する様子を表す「次第に」などは「動き」あるいは変化の現れ方を修飾していることがわかる。さらに、立ち止まらずに、少しずつ変化し続ける様子を表す「だんだん」や物事が次から次へと続いて、滞りなく進む様子を表す「どンドン」などの修飾成分も同じく、その変化や進行の進み方が急ではなく、緩いことを表している。従って、上記のように漸進性を表す副詞的修飾成分は「～出す」形よりは「～始める」形と共起しやすいということが【表1】からも容易に確認されよう。【表1】は、「～始める」「～出す」形と漸進性を表す副詞的修飾成分との共起関係の違いを示したものである¹⁴。

【表1】漸進性を表す副詞的修飾成分

局面動詞 副詞	始める	出す	副詞の総数
次々と	7(100%)	0(0%)	7
次第に	24(92.3%)	2(7.7%)	26
少しずつ	24(85.7%)	4(14.2%)	28
徐々に	10(83%)	2(16.6%)	12
どンドン	3(75%)	1(25%)	4
ますます	3(75%)	1(25%)	4
だんだん	13(61.9%)	8(38.0%)	21

2. 突発性を表す修飾成分との共起関係

上述した内容と関連して次のような例文を見てみよう。

- [26] けれど唇は密封されたかのように固まっている。あなたは詩集が送られてくるまで道子さんなど忘れきっていた。そして急におびえ出した。それは攻撃されそうな不安がもたらしたひとつの身構え方、……。 (夏)
- [27] 私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。 (三2)
- [28] 風呂場ではなく戸外を走る。これが突如として全米各地の大学で流行し出した。 (若き)
- [29] 美沙子はにわかにその事実におびえ出した。 (若き)
- [30] 「よかったわね。ミーシャの罪が軽くて」するとカバちゃんは、いきなり、わっと泣き出してしまったのだった。 (愛)
- [31] 千代は手をさし伸ばし頼圀の膝元から子供を受け取った。途端に子供は泣き出した。 (野)
- [32] そういうと、広い十畳間に南窓と三人の弟子が坐っているのを、はじめてみるような眼つきで見廻して、不意にケラケラ笑いだした。笑い終ると、先程から縁先に立って、じっと庭の色づいた蔦のからみついている石燈籠に見入っていた小坊主をよんだ。 (雁)
- [33] 駅の附近にはたちまち人家が殖えだし、そうなるこんな田舎に病院を建てて……などと案じていた人々は、今さらながら基一郎の先見の明、その卓抜な直感力の冴えに驚嘆の念を覚えるのだった。 (楡)

例文の [26] ~ [33] の波線を引いたところのそれぞれの修飾成分は「～出す」形の開始の仕方を修飾限定している。例えば、進行の速度が大きいことを表す「急に」、予想しない事態が何の前ぶれもなく起こる様子を表す「突然」「突如」「不意に」、急に変化が現れる様子を表す「にわかに」、予定しない事態が起こる様子を表す「いきなり」、非常に短期間の間に事態が大きく変化する様子を表す「途端に」「たちまち」などの共起からもわかるように、これらの修飾成分は事象（コト）の起こり方を修飾限定している¹⁵。さらに、その様態、状態の変化を緩急（速さ）の面から見ると、急であったり、大きく変化する事がわかる。つまり「～出す」形は上記の例文からも窺えるように開始の仕方の速さを表す意味特徴を備えているので、普通「突発性」の副詞的修飾成分と共起する場合は一般的であると言える。従って、突発性を表す副詞的修飾成分は【表2】に示すように、「～始める」形よりは「～出す」形と共起しやすい傾向が認められる¹⁶。

【表 2】突発性を表す副詞的修飾成分

局面動詞 副詞	出す	始める	副詞の総数
途端に	12(100%)	0(0%)	12
たちまち	23(95.8%)	1(4.1%)	24
急に	49(83.0%)	10(16.9%)	59
不意に	9(81.8%)	2(18.1%)	11
突如	4(80.0%)	1(20%)	5
いきなり	5(71.4%)	2(28.2%)	7
突然	22(70.9%)	9(29%)	31
にわかに	6(66.6%)	3(33.3%)	9

このような事実は、次のような例文からも確認されよう。

- [34] 僕はだんだん彼女のこうした口調にいらいらして来はじめた。(星)
- [35] 玉枝は下腹の鈍痛が次第にひどくなりはじめたので、京都駅に下りた時、待合室のベンチにすわってしばらく痛みをこらえていた。(雁)
- [36] 原稿を取りあげて、どンドン拾い始めた。(路)
- [37] 僕のなかに、虫がのり移った。それは羽音をたてて突然動き出したのだ。(星)
- [38] それまで静かだった雲海の表面がにわかに動き出したのである。(孤)
- [39] その時、私のこの勝手な行為が、文化放送に対する金の面子をどれほど傷つけることになるか、ということが急に心配になり出した。(一瞬)

例文 [34] ~ [36] のそれぞれの文脈からも窺えるように「~始める」形と共起する修飾成分は「~始める」形の開始の仕方が緩いことを示しているのに対し、例文 [37] ~ [39] の「~出す」形と共起する修飾成分は「~出す」形の開始の仕方が急であることを示している。

特に、「~出す」形は、過程における動作事象が成立する最初段階の開始の局面だけに注目するという開始の仕方を取っている¹⁷。

「~出す」形はこうした開始の仕方を取っているため、「~始める」形と共起しやすい修飾成分のうち「漸次的な変化」の性質を有している「次々と」「次第に」「徐々に」「だんだん」「どンドン」などは共起しにくい特徴を持っている。

従って、例文の [34] ~ [36] の「~始める」形を「~出す」形に置き換えると不自然な感じがするのである。しかし、一方、「~始める」形が「突発性」の副詞的修飾成分と共起が許される文脈もあり、これは過程における動作事象の最初局面だけに重点を置く場合であると説明できる。例えば、次のような例文の場合である。

[40] ところが、陽がまさに落ちようとした瞬間、風いでいた海面が、にわかに波立ちはじめたのである。(陥落)

[41] 未紀は水をおそれずにいきなりクロールで泳ぎはじめた。(聖)

[42] 太郎は、急におろおろし始めた。(太郎)

[43] 「ええ、そう」と女は言った。「音場がさっきから突然乱れはじめたの。祖父の身にきつと何かがあったのよ。ねえ、聞こえてる？」(世界)

例文の [40] ~ [43] の「にわかに」「いきなり」「急に」「突然」などの修飾成分は「～始める」形の開始の仕方を修飾限定する。このように「～始める」形と「突発性」の修飾成分とが共起する文脈は、前で触れたように、過程における動作事象の最初段階の局面だけに重点を置く場合であろう。言い換えれば、「突発性」の副詞的修飾成分と「～出す」形が共起する場合、突発性の副詞的修飾成分が開始の仕方の速さ、つまり時間や変化の緩急が急であることを強調する表現になり、それ以後の継続の如何は予測できないのに対し、「～始める」形が「突発性」の副詞的修飾成分と共起する場合は、連続的な過程における動作事象の最初段階の開始の局面に重点が置かれるとともにそれ以後の継続の如何も予測できる開始の仕方を取っていると見なした方がよい。

上記例文からも窺えるように突発性の副詞的修飾成分と共起する場合、「事態成立以後の継続の如何」という点を除いては、「～始める」形と「～出す」形を置き換えても不自然な感じはほとんどしない。

つまり「～出す」形は、基本的に単純な開始の意味の他に「動作、状態の強調」や「開始局面の早さを強調する」という含みを合わせ持っており、上記例のような「～出す」形ならではの意味特徴を表す文脈においては、「～始める」形は「～出す」形の表す意味をそのまま伝えることはできない。

一方、以下の例でも見られるように、無意志性を表している文脈における「～始める」形では、突発性の副詞的修飾成分と共起する場合においても、「～始める」形はそもそも「～出す」形が持っている含みの一つである「無意志性」の意味特徴を「～出す」形ほどは伝えられない¹⁸⁾。

[a] 今度はいきなり大声で泣きじゃくり始めた。

[b] 今度はいきなり大声で泣きじゃくり出した。

上述したように「～出す」形は「突発性」の副詞的修飾成分と共起するのが一般的であると言える。しかし、以下の例で見られるように、「漸進性」を表す副詞的修飾成分と共起する場合も出てくる。このような場合、「～出す」形が「漸進性」を表す副詞的修飾成分と共起する主な理由として考えられるのは、前項動詞の意味に起因すると言えるであろう。つまり、後項動詞の「～出す」自体が漸次的な意味を表すのではなく、そもそも前項動詞自体が漸次的な意味を備えている場合、「～出す」形の動詞も「漸次的な変化

の副詞的修飾成分」と共起できるようになるのである。

- [44] 同じ仕事をする人たちや出版社から送ってくる本もどんどんふえだした。(冬)
→前項動詞「ふえる」は段階性、および進展性を備えている。¹⁹⁾
- [45] 加藤は、ゆっくりゆっくり坂を登り出した。(孤)
→前項動詞「登る」は段階性、および進展性を備えている。
- [46] 司祭も馬に乗せられ一行はのろのろと進みだした。(沈)
→前項動詞「進む」は段階性、および進展性を備えている。

3. おわりに

「～始める」、「～出す」形は、文脈によっては、置き換えが可能な場合もあるが、置き換えると不自然な場合も多い。これは、前で指摘したように「～始める」、「～出す」形の開始の仕方に密接な係わりを持つ。両者は「過程性」²⁰⁾の意味特徴を持つ前項動詞と結合し、動作事象の始まりの局面を表す面では同様であるが、前項動詞の下位類の意味特徴によって結合の可否の決まる場合がしばしばある。一方、副詞的修飾成分は、文中における「～始める」、「～出す」形と共起しながら、これらの開始の仕方を修飾限定する役割を担っている。特に、副詞的修飾成分との共起関係について見ると、「～始める」形は漸次的な変化を表す、言わば「漸進性」の修飾成分と「突発性」の修飾成分と共起し得るのに対し、「～出す」形は「突発性」の修飾成分と共起しやすいという傾向がかなり顕著に認められる。例えば、「～始める」形と共起する副詞的修飾成分である漸次的な変化を表す「次第に」「だんだん」「次々と」「どんどん」「ますます」などの「漸進性」を持つ修飾成分は、「～出す」形と共起することは少なく、「～出す」形は、急であることを表す「突然」「急に」「いきなり」「途端に」などの「突発性」の意味特徴を持つ修飾成分と共起しやすいという特徴が認められる。但し、「～始める」はこのような「突発性」の修飾成分と共起することもある。このように「～始める」、「～出す」形は開始の仕方が幾分異なることがわかった。以上のことは「～始める」、「～出す」形が開始の仕方をめぐって、文中において異なる役割を果たしていることを示唆するものであろう。

注

- *1 局面という用語は、奥田 (1977) によるもので、局面動詞については、小田 (1986) と山崎 (1995)、桑原 (1998) などが公表されているだけである。また、山田 (1984) では、これを「局相アスペクト」、「局面 (phase)」と呼んでいる。本稿でも、この局面 (phase) という用語を用いることにする。そして、本稿はあくまでも「局面動詞」というものを総合的に考察するための前提となるものである。そのため、今後は局面動詞の本質の解明を中心に考察を進め、それとともに、従来の「局面動詞」というものの新たな規定などについても検討していきたいと考えている。
- *2 「～始める」形と「～出す」形の開始の仕方に関連する先行研究には、以下のようなものが挙げられる。寺村 (1984) では、「～ハジメル」と「～ダス」は、開始を表す用法としては殆ど重なるが、一方が自然で、他方が不自然な場合もわずかだが、見出されると指摘している。また、森田 (1977) で

は、「～だす」は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。「開始」よりは「新たな事態の成立」の意識が強い。だから、人間の行為に使われても、意志性がない。「～始める」は継続する作用・動作の開始意識が強いとする。さらに、姫野(1999)では、「出す」の基本的意味である「外部への移動」は、「開始」の場合にも意味の根底において引き継がれ、連続している。内部に込められていたものが、何かのきっかけからどっと外部に出て、ことが始まるという事態は容易に想像されることである。そこには、人為的な力の作用というよりは、内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられるという指摘がある。

*3 傾向差が生まれる背景を細かく考察する際には、同一主体の繰り返しの開始の局面を取り立てているか、別々の主体によって、繰り返される開始の局面を取り立てているか等の問題に留意する必要があるが、本稿では、全体的な傾向差を確認するという目的を優先させ、敢えてこの問題に言及しない。傾向差が生まれる背景の細かい考察に関しては、既に別稿を準備している。

*4 「雨が降り始める⇔雨が降り出す」では置き換えが可能であるが、これらは違う開始の仕方を取っている。それは、例えば、次のような副詞的修飾成分と共起する場合は両方とも自然であるが、例文に示したように、「いきなり」「にわかに」という修飾成分を加えると個人差はあるかもしれないが、不自然な感じがする。

a 急に雨が降り始めた。⇔ 急に雨が降り出した。

b 突然雨が降り始めた。⇔ 突然雨が降り出した。

*5 本文中の用例は、[a][b]は作例、その他の番号で示したものは出典を持つものである。

*6 姫野(1999)では、「今にも～しそうだ」という現実化の直前の様相を表す表現で、自然現象の場合は、下記例文のように「だす」のほうが適しているという本稿と同様な指摘がある。

今にも雨が降りだしそうだ：?雨が降り始めそうだ

今にも布が燃えだしそうだ：?布が燃え始めそうだ

しかし、人間の生理的現象、或いは感情表現に関わる動詞のうち、「泣く、笑う」などのように自分の意志が働いているというより、むしろ反射的な行為を表す動詞の場合も「今にも～しそうだ」のような表現と共起することができる。

a 弟は何か口を利けば今にも泣き出しそうな気がしたのである。

b 京子は今にも笑い出しそうな顔をしている。

*7 北原(1981)では、連用修飾成分を情態修飾成分・程度修飾成分・時の修飾成分・叙述修飾成分・陳述修飾成分の五つに分類している。これらの中で、情態修飾成分について次のような概念規定を与えている。「情態的概念を具有し、動作・作用あるいは存在などの概念を修飾限定するものである。動詞は動作・作用あるいは存在などの概念を具有する。したがって、情態修飾成分は動詞から構成される文の成分を修飾するのである」とする。

本稿では、上記の修飾成分のうち、情態修飾成分と「～始める」「～出す」形との共起関係、つまり、どういう情態修飾成分と「～始める」「～出す」形との共起関係が認められるのかの傾向性を記述することを目的に考察を進める。

*8 従来副詞の分類を試みている諸論を挙げれば、石神(1978)と鈴木泰(1980)、仁田(1983)、矢澤(1983)などがある。矢澤(1983)では、本稿で扱う副詞的修飾成分をより広く扱い、情態修飾成分の整理を詳細に行っているので、本稿では氏の分類に従い、考察を試みる。

*9 本稿で取り上げる(突然、にわかに、いきなり、急に、不意に、途端に、たちまちなど)の突発性を表す副詞的修飾成分は氏の様態相のうち生起相に当たる。そして、(だんだん、次第に、次々と、ますます、どんどん、少しずつ、ゆっくりなど)の漸進性を表す修飾成分は「進行相修飾成分(単に動きの時間的進行の度合を表すばかりでなく、程度の大きい方への進行の度合いも表す)に当たる。ただし、氏は「ゆっくり」の場合は動きそのもののサマを表すとし、「動作相修飾成分」と分類する。一方、「進行相修飾成分」の場合、「シダイニ」「ジョジョニ」「マスマス」「少シズツ」順に、時間的進行から程度的進行を表わす傾向が強いと指摘している。本稿では、上記のような氏の指摘を受け、「相」の下位に副詞的修飾成分の語彙的意味特徴(変化の速度を表すこと)に注目し、「生起相修飾

成分)を「突発性を表す修飾成分」と呼び、「進行相修飾成分)を「漸進性を表す修飾成分」と呼ぶことにする。

- *10 矢澤(1983)では、被修飾成分が「シハジメル」「シダス」などの形となった場合、両者には、関係構成のあり方の差が、修飾の奥行の違いとなって現れるとし、例えば、「彼ハ イキナリ 速ク 走り始ハジメタ」のような文は、「速ク走ル」コトヲ「イキナリ」開始したという意を表わし、「走ル」コトヲ「イキナリ速ク」開始したとか「イキナリ速ク走ル」コトを開始したとかいう意は表わさない。つまり、「速ク」が「走りハジメル」の「走り」を修飾限定し、「イキナリ」が「ハジメル」を修飾限定するといった修飾の奥行の差であるとする。
- *11 本稿では、資料として現代小説及び新潮文庫の100冊(新潮社版)を用いた。新潮文庫において「～始める」「～出す」形と共に起する動作の様態を修飾する副詞的修飾成分「ゆっくり(と)」「のろのろ」とはそれぞれ下記表に示したような数字であった。

局面動詞 副詞	始める	出す	副詞の総数
ゆっくり(と)	36(76.6%)	11(23.4%)	47
のろのろと	4(80%)	1(20%)	5

- *12 矢澤(1983)では、程度的進行の強い「少シズツ」の場合は下記例文のように「突然」「ニワカニ」と共起し得るが、時間的進行の強い「シダイニ」「ジョジョニ」はこれらと共に起しがたいようであるという示唆に富む指摘が見られる。

[a] A社ノ株ガ突然スコシズツアガリハジメタ。

[a]?? A社ノ株ガ突然シダイニアガリハジメタ。

[b]? A社ノ株ガ突然ジョジョニアガリハジメタ。

一方、「シダイニ」「ジョジョニ」は、「三時」の如く、時点を示すものとは共起し得ず、一方では、生起相修飾成分でも、「ヒキツツキ」「シバラクシテ」など、生起の時点_をを明確に示さないものとは共起し得る。ここから、時間的進行の強いものは生起相に対して、その生起が一時点で定まらないこと、という制約を加えるものだと考えられるとする。

- *13 矢澤(1983)の指摘通りに「徐々に」は、例文に示したような用法の他、次の例文[a]～[c]からも窺われるように「量」なり、「(時間)量」、修飾内容の「程度」の大きい方への進行の度合いを示す場合もある。

[a] 前田一派は巧みに手中におさめようと、陰謀を徐々に進めはじめたのだった。(人民)

[b] 内藤はその微妙なタイミングを徐々に掴みはじめてきた。(一瞬)

[c] 徐々に体に冷たさを感じ始めました。(錦)

- *14 新潮文庫における「～始める」と「～出す」の総数はそれぞれ「～始める」1747(37%)、「～出す」2954(63%)であった。この「出す」形の数字からは「～出す」の本来の意義(外部、全面、表面への移動)を表すもの(2556例)は除いてある。

- *15 起り方を修飾限定している例文の「突然」「突如」「急に」「いきなり」などはその具有する性質がよく似ており、置き換えの可能な場合が多くあるが、例えば、以下の例文からも窺われるように、「突然」は、何の前触れもなしに急激な変化が起こることを表し、「突如」は重大な事柄が起こったことについての驚きの暗示を伴う。また、「急に」は事態が大きく変化することを客観的に表し、予想しない事態かどうかには言及しない。さらに「いきなり」は前段階を踏まずに新たな事態が起こるというニュアンスがある。

(a) 突然おびえ出した。(それまで何もなかったのに)

(b) 突如おびえ出した。(何もおびえることはないだろうに)

(c) 急におびえ出した。(特定の感情なし)

(d) いきなりおびえ出した。(理由もなくおびえ出した)

- *16 現代小説及び新潮文庫の100冊（新潮社版）を資料とした「～始める」「～出す」形と共起する副詞的修飾成分については表1～表2で示した。ここではその外の副詞的修飾成分のうち、動作と状態を表すもの（動作、状態という分類は『副詞』（1987、茅野直子他 荒竹出版）に従った。）を挙げておく。「～始める」形とだけ共起するものとしては、動作を表す副詞的修飾成分の場合、「こっそり」「よたよたと」「ぶるぶると」が各1例、状態を表す副詞的修飾成分の場合、「わっさわっさ」「ぼつりぼつりと」「とめどなく」「じっとり」「陽気に」「じろじろ」「きらきらと」「明らかに」が各1例見られた。「～出す」形とだけ共起するものとしては、動作を表す副詞的修飾成分の場合、「口々に」「べらべら」「つっと」「じっと」「さっさと」「すばやく」が各1例、状態を表す副詞的修飾成分の場合、「平然と」「ゆるゆる」「怒々と」「ぼつぼつと」「ぐるぐると」「なめらかに」「着質に」「あらかた」「きらきらと」「かたかた」「がたがた」「吃吃と」「ぐいぐい」「くすくす」「ひよいひよい」が各1例見られた。なお、この調査で認められた副詞的修飾成分のうち、ここに挙げなかったものについては別稿において扱う。
- *17 以下の例文のように、「～だす」形は「ある事実が開始した、発生した」ということ自体にだけ重点が置かれる表現形式である。これと関連して次のような例文を見てみよう。
- (a) 田島が話すまでもなく、警察が動き出すに違いない。
→警察が出動したこと自体に重点が置かれる。
- (b) だが動き出した感情は止まらない。男のずるさに腹をたてていながら、その実、裏ではこの人にならなをいっていいといった甘えもある。
→感情に変化が生じたこと自体に重点が置かれる。
- (c) おまえたちは私のたおれたところから新しく歩み出さねばならないのだ。
→新しく出発するということ自体に重点が置かれる。
- (d) 大学ノートに向かって私は書き出していた。書き始めると、すぐにいかれたように書き進んだ。十日程、ノートはぎっちりと文字で埋まった。
一方、「～始める」形は上記例文(d)のような文脈から窺えるように、過程における動作が成立し、それ以後も続くことが予測される場合に使われる開始の表現形式であると言える。
- *18 普通、心の動きに伴って不意に起こる現象は「出す」形の方が用いられる。
- *19 ここでいう段階性というのは、動作変化に至る過程が段階的であることを意味し、進展性というのは、主体の状態の移り変わり、あるいは状態の変動を指す。つまり、気がついた時には、もう相当進んでいる。徐々に進む時点が定かではないことを指す。
- *20 鈴木(1957)では、動作動詞を(イ)継続動作性動詞と(ロ)瞬間動作性動詞とに分け、(イ)は、状態の変化とともに、そのプロセスが問題となる動きを表す動詞であり、(ロ)は、変化だけが問題となる動きを表す動詞であると定義している。本稿での〈過程性(ある程度の長さを持つもの)〉という意味特徴は、この点から示唆を得たものである。なお、用語は仁田(1980)、森山(1988)に従ったものであるが、内容は必ずしも同じではない。

追記：本稿は、1999年9月18日「筑波大学国語国文学会第23回大会」において口頭発表したものをもとに加筆修正したものである。研究発表の会場並びに論文作成の際には、林史典、矢澤真人、橋本修先生から貴重なご教示をいただいた。記して、ここに感謝の意を捧げたい。

《例文出典及び用例採取資料》

- (1) 中学国語教科書 国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 光村図書
 (2) 高校国語教科書 1. 新選 現代国語Ⅰ、Ⅱ 尚学図書 2. 新国語Ⅰ、Ⅱ 三省堂
 3. 新しい国語Ⅰ、Ⅱ 東京書籍 4. 国語Ⅰ、Ⅱ 光村図書
 5. 現代国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 筑摩書房
 (3) 新聞 朝日新聞 朝刊 (1991、9月～11月)
 (4) 小説 例文及び用例は CD-ROM 新潮文庫の100冊新潮社版所収(作家・作品名は略号で示し、出典などは紙幅上省略する)と以下の小説から採取した。

略号

- (1) 中学国語教科書 国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ → 中・Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ
 (2) 高校国語教科書 1. 新選 現代国語Ⅰ、Ⅱ → 高1.2 2. 新国語Ⅰ、Ⅱ → 三1.2
 3. 新しい国語Ⅰ、Ⅱ → 新1.2 4. 国語Ⅰ、Ⅱ → 光1.2
 5. 現代国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ → 筑1.2.3
 (3) 新聞 朝日新聞 朝刊 (1991、9月～11月) → 朝
 (4) 小説

愛をかたるエリニユス	→愛	熟れてゆく夏	→夏	運命の時刻表	→運
カフェ・オリエンタル	→カ	幸せを売る男	→幸	深夜草紙 Part 5	→深
東京恋物語	→東	冴子の東京物語	→冴	不思議な国のエリコ	→不
ベ	→ベ	星影のステラ	→星	坊っちゃん社員	→坊
むさし日曜笑図鑑	→む	恋の途中下車	→車	暗い旅	→暗
草枕	→草	101回目のプロポーズ	→プロ	或る女	→或
女社長に乾杯	→女	長距離ライダーの憂鬱	→長	街角に投げキッス	→街
1973年のピンボール	→ピン	ペーパーマンでつかまえて	→パ	夢のように日は過ぎて	→夢
消えたドライバー	→消	あしたがあるから	→あし	尋ね人の時間	→尋
晴、ときどき殺人	→晴	沈黙	→沈	さりげなく、私	→さり
天使の怒り	→天	大忙しの二日間	→大	野わけ	→野
おまかせ!キュービッド	→おま	生き方を楽しむ	→生	流れる	→流
恋歌	→恋	明日物語	→明	氷点	→氷
伊豆の踊り子	→伊豆	三四郎	→三	羅生門	→羅
早春物語	→早	食卓の情景	→食	冬の光	→冬
花埋み	→花	人民は弱し 官吏は強し	→人民	砂の女	→砂
剣客商売	→剣	沈黙	→沈	聖少女	→聖
一瞬の夏	→一瞬	国盗り物語	→国	太郎物語	→太郎
孤高の人	→孤	点と線	→点	忍ぶ川	→忍
雁の寺・越前竹人形	→雁	錦繡	→錦	戦艦武蔵	→戦
羅生門(*)鼻	→羅	歌行燈・高野聖	→歌	若き数学者のアメリカ	→若き
楡家の人びと	→楡	路傍の石	→路		
フンスタンティノープルの陥落	→陥落	世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド	→世界		

参考文献

- 天沼 寧 1978 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 石井正彦・野村雅昭 1987 『複合動詞資料集』国立国語研究所
- 舟保健一 1981 「程度副詞と文末表現—「ひじょうに」を中心に」金沢大学語学・文学研究
- 石神照雄 1978 「時の修飾成分」『芸芸研究』第88集
- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階」『国語国文』8号
宮城教育大学『ことばの研究・序説』所収 むぎ書房
- 1988 「時間の表現 (1) (2)」『教育国語』94号、95号
- 小田由美 1986 『局面動詞「～はじめる」について』『国語研究』第4号 横浜国大
- 小矢野哲夫 1983 「副詞の呼応—誘導副詞と誘導形の一例」渡辺 実編『副用語の研究』所収
- 呉 鏡烈 1993 「アスペクトと局面動詞」『日本語と日本文学』第19号 筑波大学国語国文学会
- 北原保雄 1981 『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 工藤 浩 1977 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院
1985 「日本語の文の時間表現」『言語生活』403 筑摩書房
- 工藤真由美 1995 「アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現」ひつじ書房
- 桑原文代 1998 「変化の局面を表す「～はじめる」」日本語教育 99
- 柴田武編 1987 「ことばの意味1、2」平凡社
- 鈴木重幸 1957 「日本語動詞のすがた (アスペクト) について—～スルの形と～シテイルの形—」言語
学研究会報告『日本語動詞のアスペクト』(金田一春彦編 1976 に採録)
- 鈴木 泰 1980 「状態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要 (人文科学)』9・3
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
1992 『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版
- 茅野直子 (他二人) 1987 『副詞』荒竹出版
- 仁田義雄 1980 『語彙論的統語論』明治書院。所収
1983 「結果副詞とその周辺」『副用語の研究』。所収
- 姫野昌子 1977 「複合動詞「～出る」、「～出す」」『日本語学校論集』4号、
東京外国語大学附属 日本語学校
1999 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森田良行 1977 『基礎日本語1、2、3』角川書店
- 森山卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 矢澤真人 1983 「情態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察」
『日本語と日本文学』第3号 筑波大学国語国文学会
1985 「状態修飾成分と<シテイル>の意味」『日本語学』明治書院
1992 「格の階層と修飾の階層」『芸芸言語研究 言語編』21 筑波大学芸芸・言語学系
1994 「「格」と「階層」」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂
- 山崎 恵 1995 「開始の局面を取り立てる局面動詞について—「～始める」「～出す」の用法比較—」
『阪田雪子先生古希記念論文集 日本語と日本語教育』三省堂
- 山田小枝 1984 「アスペクト論」三修社

(オー チョンヨル 慶北大学校 日語日文学科)